

ワイマール期在独日本人の ベルリン社会科学研究会

加藤 哲郎

- 1 はじめに——1927年の高野岩三郎と有澤廣巳・国崎定洞
- 2 ベルリン社会科学研究会の群像
- 3 提唱者蠟山政道と国崎定洞の対立
- 4 有澤廣巳はなぜベルリン滞在を延長したか
- 5 おわりに——読書会からベルリン反帝グループへ

1 はじめに——1927年の高野岩三郎と有澤廣巳・国崎定洞

1971年に刊行された『大原社会問題研究所50年史』の1926年の項は、「高野所長第3回渡欧前後」となっている。大原社研初代所長高野岩三郎は、この年9月19日にヨーロッパに向けて出発し、翌27年11月に帰国する。この旅について、大内兵衛・森戸辰男・久留間鮫造監修『高野岩三郎伝』（岩波書店、1968年）の大島清作成「年譜」は、「1927年1月、（ミュンヘン）ウエップ著『産業民主制論』訳稿の校閲をつづけ、5月12日完了。2月8日、小作調停委員引きつづき就任を承諾。3月2－7日、エッセンにてドイツ共産党大会傍聴。3月20日、ウィーン旅行。4月16－18日、ニュルンベルヒにてドイツ社会民主党所属アカデミカー大会傍聴。5月16日、ミュンヘンよりベルリンに移る。同月22－26日、キールに行き、ドイツ社会民主党大会傍聴。7月1日、ベルリン発（内藤赳夫同伴）、モスクワに向う。同月3日、モスクワ着。マルクス・エンゲルス研究所等を見学。同月8日までモスクワに滞在し、28年ぶりに片山潜と再会する。7月11日、ミュンヘン着、19－24日スイス旅行、8月17日－9月2日、パリおよびロンドン旅行。ミュンヘン滞在中に『資本論』原典第1・2巻読了。9月26日、ミュンヘン発（ハンブルグ、ニューヨーク、サンフランシスコ経由）、11月10日（推定）横浜着帰朝。年末、日本労農党の党首または顧問就任を懇請されたが断る」と記す（460-461頁）。

この高野の旅が、幻と消えたいわゆる連盟版マルクス・エンゲルス全集の刊行計画に関わったことは、よく知られている。この旅で、高野が「私は16年振りの世界旅行に依って自分のかねて持っていたブルジョア・イデオロギーを或る程度まではらひのけることが出来たと考えている。希くは白髪を染めて一とはたらきしたいと思っている」と述べたのは（高野「欧露をめぐるて」『労働運

動』1929年1月), ミュンヘンで『資本論』を再読し, 社会主義ソ連を見て片山潜と再会したからばかりではないだろう。ワイマール共和制下のドイツで, 共産党(KPD)と社会民主党(SPD)の両党大会を実際に傍聴したことが, その後の高野と日本の無産政党との関係にも影を落としている。『高野岩三郎伝』によると, 3月エッセンのKPD第9回大会時は九州大学教授菊池駒次と労働者のデモに加わっているが, 4月ニュルンベルグのSPDアカデミカー大会, 5月キールのSPD党大会に同行したのは, 東京大学助教授(当時)の有澤廣巳, 国崎定洞, 京大助教授山田勝次郎, 九州大学の菊池勇夫ら, ベルリンに留学中の日本人若手学者たちであった。この高野と共にSPD大会を傍聴した関東大震災後の文部省派遣在外研究員たちが, 小論の主題であるベルリン社会科学研究会の中核メンバーである。

『高野岩三郎伝』には, 27年4月のSPDアカデミカー大会で旧知のレーデラー教授と共に会ったのは有澤廣巳, 菊池勇夫, 国崎定洞, 5月のキール党大会を一緒に傍聴したのは有澤, 堀江邑一, 山田勝次郎らとある(261・263頁)。両方に同行したのは有澤廣巳のみに見えるが, 有澤自身の回想では, アカデミカー大会には高野とレーデラーから誘われたので「二, 三の友人をさそって出かけることにした」といい, キール党大会にはヒルファーディングと高野の誘いで「また数名の友人を語らって」旅行がてら出かけた, としか述べていない(有澤『学問と思想と人間と』毎日新聞社, 1957年, 100・104頁)。

ここに, 一枚の写真がある。SPDキール党大会の折りに, 有澤ら日本人傍聴者一行が「高野先生のお供をしてキール大学を訪問(有澤)したさいの記念写真である。そこに写っているのは, おそらく有澤が記しているキール大学世界経済研究所のハルムス教授と思われるドイツ人を間にはさんで, 6人の日本人である。高野・有澤のほか, 山田勝次郎・国崎定洞・舟橋諄一・谷口吉彦である。この写真は, 医学史家川上武が, 当時東京大学医学部助教授で日本における社会医学の先駆者であった国崎定洞の生涯を探究する過程で, ベルリン留学時の友人山田勝次郎・とく夫妻から提供されたものである。川上武・上林茂暢『国崎定洞』(勁草書房, 1970年)の口絵に初出した。国崎定洞は, 1928年にドイツ共産党に加わり日本語部を創設, ナチスの台頭を逃れて32年にモスクワに亡命したが, 37年旧ソ連で粛清された悲劇の革命家であった。高野・有澤・国崎がならんだキール旅行の写真は, 75年に国崎定洞の「名誉回復」が日本でなされた後に, 『国崎定洞』の改訂版である川上武『流離の革命家』(勁草書房, 1976年)に再録された。俳優千田是也の自伝『もうひとつの新劇史』(筑摩書房, 1975年)にも入っているが(148頁), ソ連の崩壊でその粛清経過まで解明された国崎定洞評伝の決定版, 川上武・加藤哲郎『人間 国崎定洞』(勁草書房, 1995年)の口絵に改めて収録されている。この写真には, 堀江邑一は入っていない。だが堀江がシャッターを押したのかもしれないので, 堀江も同行者に加えておこう。

高野岩三郎の主たる滞在先はミュンヘンであったが, キール旅行直前の27年5月16日から, 7月1日のモスクワ訪問までは, ベルリンに滞在している。高野が内藤赳夫を伴ったマルクス・エンゲルス研究所訪問, 片山潜との再会の前に, ドイツ・ソ連や日本の情勢についてうちとけて話合ったのが, ニュルンベルグで会い, キールに同行した有澤廣巳・国崎定洞らベルリン留学中の日本人若手研究者たちであつたろうことは, 想像に難くない。

ニュルンベルグとキールの双方に同行したのは, 有澤廣巳と国崎定洞である。高野が有澤にとっ

て「東大での私の恩師であり、先生いらいの統計学講座を担当することになった」ことは周知のことであるが（有澤『『神の秩序』の復刻』『朝日新聞』1967年4月11日夕刊）、国崎定洞は、東大助教授で倉敷労研を見学したことがあったとはいえ、医学者である。おそらく高野は初対面であつたろう。私は、この国崎定洞の生涯を長く探求し、ソ連崩壊でクレムリンの奥から現れた肅清秘密文書「国崎定洞ファイル」を解読して、この間3冊の書物を上梓してきた（加藤哲郎『モスクワで肅清された日本人』青木書店、1994年、加藤『国民国家のエルゴロジー』平凡社、1994年、川上・加藤『人間 国崎定洞』前掲）。

私の国崎定洞研究の側からすれば、1927年5-6月の高野岩三郎のベルリン訪問、有澤・国崎らとの交流は、当時の無産政党結成問題と日本マルクス主義の歴史との関わりで、ある意味を持っていた。日本共産党史のうえでは、山川イズムと福本イズムの双方を退け大衆的前衛党建設を説いた「27年テーゼ」がモスクワで作成される直前となるが、大正デモクラシーをくぐってワイマール民主主義の国に來たベルリン在住の日本人のなかでも、普通選挙法と治安維持法の施行による新しい条件のもとで、合法無産政党結成の問題が議論されていた。26年末に、雑誌『社会思想』に集うグループをブレンに中央派の日本労農党（日労党）が結成されたため、同じ頃山形五色温泉で再建された非合法日本共産党をバックにもつ左翼の労働農民党（労農党）系『無産者新聞』『マルクス主義』などは、右派の社会民衆党・日本農民党に対してばかりでなく、中間左翼の日労党への批判を強めていた（岡本宏『日本社会主義政党論史序説』法律文化社、1968年、など参照）。

当時のベルリンには、日本の左翼新聞・雑誌が入っていた。『改造』など総合雑誌の誌上で日本にヨーロッパ左翼の雰囲気を与えるのは、留学中や洋行帰りの学者たちの寄稿であつた。当時の左翼を席卷した福本イズムは、東大新人会や学生連合会の学生たちばかりでなく、若手研究者たちにも「理論闘争」の雰囲気をつくりだしていた。関東大震災後の文部省派遣在外研究員は、1925年度161人、26年162人、27年176人、28年157人とピークの時期であり、27年度末には431人が海外に在留していた。自然科学系が相対的に多いとはいえ、在留地の8割以上がヨーロッパであり、その8割がドイツに滞在していた（文部省専門学務局『文部省在外研究員表』昭和7年3月）。

マルクス主義研究は、社会科学のためにドイツに留学した多くの日本人研究者たちの、必須要件の一つであつた。京大河上肇門下生はもちろんのこと、東大新人会出身の蠟山政道も、政治研究会に顔を出したぐらいで直接社会運動に加わった経験のない有沢や国崎たちも、ベルリンでマルクス主義の通過儀礼を体験する。

河上肇・福田徳三らと並ぶ斯界の大御所高野岩三郎は、ベルリン在住の日本人少壮学者たちが、日本なら伏せ字でしか読めないマルクス主義文献が安価で簡単に入手でき、世界資本主義の現段階や日本の階級闘争について異国の気楽さで自由奔放に討論しているサークルに、いわば誘い込まれたのである。それが、ベルリン社会科学研究会である。

2 ベルリン社会科学研究会の群像

ベルリン社会科学研究会といっても、正式名称ではない。組織規約をもつ学会でもない。当時のベルリン在住日本人留学生の読書サークル・懇親会である。創立期のメンバーである国崎定洞は、

1926年12月25日付け小宮義孝宛手紙でただ「読書会」と記し（川上武・加藤哲郎・松井坦編訳『社会衛生学から革命へ——国崎定洞の手紙と論文』勁草書房、1977年、42頁）、同じく創立メンバーである有沢広巳は「ベルリンに滞在している文部省留學生の読書会」と記している（『学問と思想と人間と』118頁以下）。しかし、創立に加わった堀江邑一は「当時ベルリンにいた留學生有志の社会科学研究会」と回想し（「国崎定洞の憶い出」『文化評論』1975年11月）、高野・有澤・国崎らがキールに旅行中の27年5月25日にモスクワ経由でベルリンに入り、朝日新聞ベルリン特派員岡上守道（別名黒田礼二）の紹介で会に加わった俳優千田是也が「ベルリンの日本人社会科学研究会」と述べているので（千田『もうひとつの新劇史』筑摩書房、1975年、147頁・171頁）、ここではベルリン社会科学研究会とよんでおく。

会の創立の経緯は、有澤廣巳の1957年の回想に詳しい。1926年11月頃のことである。

「ぼくがベルリンについた年の秋、蠟山政道夫妻がベルリンに来られて少しく滞在されたことがあった。そのとき蠟山氏の提唱でベルリンに滞在している文部省留學生の読書会をひらくことになったのです。専門はそれぞれに異なっている、ベルリンに留学しているあいだに、なるべく広くドイツ書を読み、またドイツの問題を知っておくことが有意義であろうという趣旨だったように記憶します。最初の会合に集まった人々は、京大の谷口吉彦君、九大の舟橋諄一君、高松高商の堀江邑一君、和歌山高商の山本勝市君、福島高商の松山[貞夫——引用者注、以下同]君たちで、ほかにまだ数名いました。

この読書会はそれからずっと、ぼくが1928年5月ベルリンを立つときも、まだつづいていたので、ずいぶんがつづきました会です。毎週一回、最初のうちはたれかの下宿に集まることにしていたのですが、だんだん出席者が多くなったので、後には小さなレストランの1室を借切ることにした。ぼくが出席していたあいだだけでも十数冊の本を読んだし、また報告としてきいた問題も十指を屈することができましよう。

読んだ本も出席者の希望できめたので、むろんそう専門的なものではなく、ヴァルガの『世界経済の没落』とか、レーニンの『帝国主義論』とか、ブハーリンの『転形期の経済学』といった書物が多く、報告もドイツの賠償問題とか、合理化問題とか、一般的危機の問題といったテーマが多かったようにおぼえている。

……ぼくたちの読書会について、ぼくが忘れることのできないのは、国崎定洞君のことです。彼は東大医学部の社会衛生学の助教授として、ぼくより半年ほどおくらでベルリンに留学してきたのです。読書会のメンバーとして、彼は最もアクチヴで勉強もいちばんよくやった。ぼくはよく彼と一緒にいろんな会合に出かけていったものです」（前掲『学問と思想と人間と』118-121頁）。

1975年に発見された、1926-28年当時の国崎定洞の小宮義孝宛手紙は、日本にいる親友に宛てた私信中での言及だけに、あけすけで臨場感がある。

「僕の方では、曾田[長宗]のイトコで、小宮の知り合でその奥さんの美人なる事を君が大にほめてゐた蠟山[政道]氏が今伯林に来てゐるので（勿論二人で）彼の家で日曜に読書会をやつてゐる、集まるもの、京都の経済の 谷口吉彦（マルサスを訳した人）、九州民法 舟橋[諄一]、九州労働法 菊池寿夫[勇夫]、東京 経済 有沢[廣巳]、高松商業 堀江[邑一]、電報通

信 鈴木[東民]、と僕だ。スターリンのプロブレメデスレニニスムス〔レーニン主義の諸問題〕をやつてる、とびとびにだ、来年からはブハーリンのトランスフォルマチオン〔過渡期経済論〕をやる。中々面白い。谷口氏中々愉快だ、やはり集ると得る事もある。曾田の親類の事を云ふとわるいが蠟山氏は年の割にはあまりに老大家然としてるね、勿論わるい意味でだ。尤も吾々のグループではたしかに一番古いらしいけれど」（前掲『社会衛生学から革命へ』42—43頁）。

もっともここでの国崎の蠟山へのコメントは、年齢については誤っている。蠟山は、有澤の旧制二高以来の友人鈴木東民とともに1895年生まれ、1894年生まれの国崎より年下である。京大河上肇門下の谷口は1891年生まれで、創立時のメンバーで最年長になる。有澤・堀江・山本は1896年生、菊池は1898年、舟橋1900年生である。福島高商教授の松山貞夫には不明な点が多いが、1920年東大法学部卒業なので、同期の蠟山と同じ30歳代前半であったろう。

堀江邑一の公式の回想では、「私が国崎定洞と知り合ったのは、1926年11月頃、当時ベルリンにいた日本人留学生有志でつくっていた社会科学研究会においてである。この会は、有沢広巳、国崎定洞（以上、東大）、谷口吉彦（京大）、千田是也（演劇研究）、鈴木東民（電通特派員）、および私（高松高商）などではじめられ、そのご菊地勇夫、舟橋諄一（以上九大）、山田勝次郎（京大）、与謝野譲（鉄幹氏の甥）などが加わり、さらに翌年には土屋喬雄（東大）や蜷川虎三（京大）、平野義太郎（東大、フランクフルトから）も時折顔をみせるようになり次第に盛大になったものである。大学の助教授級の新進気鋭の学者が主で、それぞれ専門は違っていても、共通の場としてマルクス・レーニン主義の基本文献の研究の必要を感じている連中であつた」とされている（『国崎定洞の憶い出』『文化評論』1975年11月、105頁）。

この堀江の回想に、戦後日本の民主社会主義のブレインになる蠟山政道と、堀江と同じ河上肇門下でありながら帰国後河上と決別し文部省国民精神文化研究所員（経済学担当）として左翼思想取締りにあたる山本勝市（戦後自民党国会議員）の名が抜けているのは、たんなる記憶違いとは思われない。日本共産党の文化雑誌上での回想であるから、意識的にはぶいたのであろう。また、堀江は千田是也を創立メンバーとして挙げているが、前述のように千田のベルリン入りは1927年5月で、岡上守道の紹介で会に加わるから、これは誤りである。ただし堀江は、国崎定洞についての川上武による聞き取りのさいに、蠟山の名を挙げて創立の事情を説明している。こちらの方が、おそらく事実に近いであろう。

「有沢広巳君、谷口吉彦君、私の3人が、1926年3月、偶々同じ船で日本を出発したんです。そこへ、蠟山政道さんの細君も乗っていましたよ。有沢君は直接、マルセーユからドイツへ入った。私どもはパリを通して、ロンドンへ行きました。当時、ロンドン大学に蠟山さんがおり、行きがけに蠟山さんの奥さんと一緒に船だった関係もあって、知り合いになったのですよ。その後、9月になって私がベルリンに移り、10月には谷口君がやってくるし、蠟山さんもひきつづき参りまして、有沢君と4人が、ベルリンで落ち合うことになったんです。そこへ、一寸おくれて山田勝次郎君夫妻もやってきた。その頃、国崎君も——彼は、時期は同じ時分ですが、別のルートで——ベルリンに入っていた。蠟山政道の下宿で集まったときに、研究会をやろうという話になりましたね。多分、11月頃あたりから始まったんじゃないかと思います。

会場も、はじめは蠟山政道の下宿でやった。しかし、蠟山君は、2回くらい研究会に出た程度で先に帰りました。その間、2カ月くらいのような気がします。国崎君には、蠟山君のとこで会っております」(川上・加藤『人間 国崎定洞』111-112頁)。

これらから、蠟山・有澤・国崎・谷口・舟橋・堀江・山本勝市・松山貞夫・菊池勇夫・鈴木東民らが、1926年11月ないし12月に発足したベルリン社会科学研究会の創立期メンバーといえるだろう。蠟山・有澤・国崎は東大新人会出身ないし支援者で学部は違いが同年輩の助教授、谷口・堀江・山本は京大河上肇の系譜であるが谷口・堀江は有澤と渡航船が一緒だった仲、松山・菊池・舟橋は東大法学部の蠟山の同輩・後輩、鈴木東民は有澤の二高同窓で蠟山・菊池・国崎らがしばしば寄稿していた帝大新聞の元編集部員である。学問的・人的ネットワークでは結びつくが、政治的つながりはない顔ぶれである。

そして、1927年5月以降に会に加わる俳優千田是也の証言は、若手学者たちの世界を外から見ており、貴重である。

「この会には、東大の有沢広巳、土屋喬雄、山田勝次郎〔東大卒だが京大農学部助教授〕、国崎定洞、京大の谷口吉彦、九大の船橋諄一、高松高商の堀江邑一などのえらい学者さんたちが入っておられて、毎週一回、たしか土曜の午後、フリーデナウのジュードウェストコルゾーの近くのレストランのフェラインスツィンマー（集会室）に集まって、レーニンの『帝国主義論』や『国家と革命』やブハーリンの『転形期の経済学』や『史的唯物論』などをいっしょに読んだり、ドイツのマルクス主義学者を招んで話をきいたりしていた。私などには程度が高すぎたが、いい機会だと思って、翌年の夏ごろ、学者さんたちが留学期間を了えて日本に帰り、会が自然消滅するまで、なるべく顔を出すようにしていた。無産者たちのデモも集会もすぐ禁止を食い、本は××だらけというあの頃の日本からやって来た若い学者さんたちが、ここではすっかり解放され、威勢よく議論をしたり、共産党やロートフロントケンパーブンド（赤色戦線戦士同盟）のデモや集会に〈見物〉に出かけたり、ときには日本から道具をとりよせて野球をしたり、ドイツ人は野球を見たことがないというので、ここの体育学校に出向いてそのデモンストレーションをやったり、研究会のあとみんなでカント街へ中華料理を食べにいったり、そのあげく、夫人同伴でない連中は日本人留学生御用のお嬢さん方の屯しておられるカフェー・ヴィクトリアなどに押しかけたり——ともかくもたいへん結構な話ではあったが、みんなアカデミシャンばかりなので、ここの組織と直接の繋りを持っている人はひとりもいないらしかった。後にドイツ共産党に入党し、東大の医科を首になり、ここの日本人左翼グループの中心人物になった国崎定洞氏なども、その頃はまだ、やっこここの党員労働者のフリーダ嬢と仲よくなり、党への手蔓をたどりはじめたばかりの頃であった」(千田『もうひとつの新劇史』147-148頁)。

この千田の回想と、先のキール旅行の写真から、会が発足して半年ほどたった1927年5・6月段階——高野岩三郎のベルリン滞在時——には、岡上守道・山田勝次郎・土屋喬雄らが会に加わっていたことがわかる。

岡上守道は、年齢的には谷口より上の1890年生まれで吉野作造門下、東大新人会創立に関わったベルリンの著名人で、蠟山の先輩にあたる。1920年からベルリンに滞在しており、有澤と親しい帝

大新聞出身の電通特派員鈴木東民とともに、いわばジャーナリスト会員である。

山田勝次郎・とく夫妻の27年ベルリン到着月日は特定できないが、山田は会の提唱者蠟山政道の実弟で（従って国崎の医学部の後輩曾田長宗とも親戚）、ベルリンでは国崎定洞とフリーダ夫人を結びつけた最も親しい仲間の一人であった。

土屋喬雄は、27年4月1日に日本を出発してベルリンに向かい、29年7月まで滞在している（『私の履歴書』第30集、日本経済新聞社、1967年、274頁）。土屋の回想には会への言及は残されていないが、戦後すぐの時期に、日本共産党幹部となった教え子伊藤律に対して、ソ連で行方不明となったベルリン時代の友人国崎定洞はスパイではありえないと証言したことが、伊藤の没後公表された遺稿に記されている（伊藤律「三重スパイ 野坂参三」『文藝春秋』1994年1月、325頁）。

3 提唱者蠟山政道と国崎定洞の対立

ベルリン社会科学研究会は、蠟山政道のベルリン滞在（26年10月－27年春）を機に、蠟山の提唱で始まった。だが、おそらく蠟山の意図には反して、有澤廣巳と国崎定洞を中心とした左翼的なものになっていく。千田是也が到着し、高野岩三郎が訪れた27年5月段階では、蠟山や山本勝市は、すでにベルリンを去っている。

蠟山政道は、私の知る限り、この会についての記録を残していない。25年1月から27年8月の英米留学時代にドイツに立ち寄ったこと自体は、「在伯林」と署名された『社会思想』1927年2月号掲載の「独逸無産政党運動の現状と日本」から確認できるが、どうやらあまりドイツからは学ばなかったようである。わずかに没後の追悼集への長尾春雄の寄稿に、蠟山夫妻が26年にベルリンを訪れた痕跡が見られる（「大正11年頃の思い出」『追想の蠟山政道』中央公論事業出版、1982年、32頁、嶋中雄二による聞き取り「回想録——戦前の部」『東京帝大新人会研究ノート』第10号、1988年、101頁以下をも参照）。

ただし、26年10月にスイス経由でベルリン入りし、27年8月にフランス・アメリカ経由で日本に帰国した蠟山は、文部省との摩擦で予定より遅れてフランスに着いた東大法学部の同僚平野義太郎に、パリ滞在中の高崎中学の後輩井上房一郎とフランス共産党員で後の片山潜秘書勝野金政を紹介している。平野・勝野は、後にベルリンで社会科学研究会のグループと関わる（井上「高崎中学OB新人会」『追想の蠟山政道』4－5頁、勝野『凍土地帯』吾妻書房、1977年、29頁）。

山本勝市は、自民党国会議員となった戦後の回想に、27年春のモスクワ訪問後「フランスへの帰りにベルリンに立寄って、日本の教授たちが集まってマルクス、レーニンにう頂天になっているのを見て、歯がゆくて仕方がなかった」とそっけない記録を残している（『思い出の記（二）』東京山本会、1963年、28頁）。

蠟山がベルリンから離れる27年春から、この読書会が徐々にマルクス主義的になっていくことが、国崎定洞の小宮義孝宛書簡から分かる。発端は、この期のイギリス労働運動（26年総同盟ゼネスト）の評価をめぐる、会の提唱者蠟山政道と、医学者ながら日本ですでにレーニン文献を翻訳してきた国崎定洞との対立・論争である。またそれは、日本の合法無産政党問題とも関わっている。

読書会の発足当初の国崎定洞の蠟山評価は、「英国からの通信について彼の考をきいてやらうと

思つたけれどまだ機会がない。時々腑に落ちぬ事もある、曾田の話が出て中々勉強してると云つたらあれはもうずっと前から僕らを馬鹿にしてる位鼻息があらいんだと云つてゐたが曾田だつたら或はあの老大家然として若年学考にはあきたらぬかも知れぬと密かにほほえまれたよ」というものだった(第1信, 1926年12月25日、『社会衛生学から革命へ』43頁)。

ところが翌27年に入ると、国崎の蠟山評価は、次のように手厳しくなる。『改造』1926年8月・10月、27年1月号に3回連載された、蠟山のイギリス・ゼネストについての論文「総同盟罷業」を読んでのものである。

「こちらの読書会ではレニンの小児病『共産主義左翼の小児病』、国崎定洞は日本時代に和田哲二名で本邦初訳、希望閣、1926年」を大急ぎでやつてゐる。僕がレフエレントの役目をやつて色々デスカッスをやるのだ。ロー山氏は近く巴里に行くらしい。彼の英国のゼネラルストライキを見たか、彼の結論は一体何だ。要するに之が国家観に於ける日和見主義に墮したるものの当然の結果だ。超階級的理論から反動の役割に直接墮落してゐる。客観性の狭隘なる固執があはれなる主観性に墮する墮落の道は其所にある。世界を色々に説明する事が主要たる事でなく世界を変革する事が大切だ。彼にして云はしむるならば、彼はかくしてゼネラルストライキを説明し得たりと考へてゐるだらう、然しこの世界を変革せんとする立場からでなく単に説明にとどまらんとする彼が説明そのものをもあやまつてゐる経路を見よ、之があはれなる中正なる態度の落ち行く必然の地獄なのだ。

エンゲルスのベルンスタインに宛てた手紙を有沢[廣巳]及鈴木[東民]と共に訳すつもりだ。4月までには完成するつもりだ。中々六ヶしいが素晴らしいものだ。予備的労作としてコンムニストインテルナチオナール[コミンテルン理論機関誌]に紹介された批評を訳して浅野[晃]に送つた。マルクス主義[労農党系雑誌]にのるかも知れぬ。とにかくこれを見てエンゲルスと同時にレニンの偉大さを思ふ(第2信, 1927年1月29日、『社会衛生学から革命へ』48-49頁)。

さらに1ヵ月後には、蠟山を「裏切り者」と断ずる。どうやら日曜蠟山宅での読書会の席上で、二人の論争になったらしい。国崎定洞の小宮宛私信での批判は、論争のあり方から大原社会問題研究所の学風にまで及ぶ。

「日曜の会合はずつとやつてゐる。やつぱりためになる。レニンの小児病は僕が一人でレフエレントをやつてこの間終つた。あまりデスカッスのないのが残念だがやはりここに於ても問題は現実の分析のための具体的現実の把握の欠如若くは不足が根本原因だ。然し大に勉強になった、僕の訳はまづい、今度2版でも出る時は大に改めてよくしなくちやならない……小児病がすんで今度はブハーリンのトランスフォルマチオン[過渡期経済論]をやる、日本で熟読の機会がなかつたから、こちらでやる。エコノーム[経済学者]があるから万事いいかも知れぬ。

君は[雑誌]改造にのった蠟山氏の英国同盟罷業を読んだか。あれは一体何の事だ。火星の世界でもいつてる寝言なのか。前に改造に出した戦後英国の進んだ道で出てゐた超階級的立場はさらに一步をすすめてゐる、それはプチブルの寝言だ——そして今や更にわけの分らぬ右翼裏切者の道徳的なロマンチックな讃歌に終つてゐるぢやないか。馬鹿馬鹿しいにも程がある。

一掬同情の涙が禁じ得ないなんてこつちこそ一掬同情の涙禁じ得ないよ。ソヴィエツトユニオンの社会主義建設事業の発展の事実が世界の労働階級に及ぼす心理的影響の問題について否定的の——いや見解の相違だつて議論をにげた彼——態度をとる、それは余りに明らかだ。それはやがてこの心理発生の原因たるソヴィエツトユニオン発展の具体的現実——さらにはソヴィエツトユニオンの成立を持ち来らした世界的現象の具体的根拠の否定にさへ及ぶ——これが具体的現実の重要性をとく彼の内的矛盾だ。……

浅野からこの間手紙が来た。行人会〔東大新人会大正14年卒業組の同窓会〕の事も聞いた。君のこの間の手紙と相待つて多少共日本の事はわかる。この問題については経済の有沢君と一番語る機会が多い。その後まだ1月にもならぬから特別なる発展も外部的にはあらはれていないが内部的発展と醸酵とはより強いものがあるかも知れぬ。誠に最近の運動の発展は数年来日本の運動内部に密かなる発展をとげつつあつた諸傾向に明白なる表現を与へた。……

論争のない会合が何に役立つのだ。それは硬化と墮落とより外に行く先はないのだ。カンブ・カンブ。この中にこそ進歩はある、大に論争する事だ。論争の最後の判決は現実の歴史がしてくれる、時々刻々にしてくれるだろう。論争の回避が一番いけない。自らの自信に忠実であれ、但し現実の歴史による批判に眼を開いてあれ、自己批判に忠実なれ。

この間有沢と話したら大原社会問題研究所の連中があのの中では絶対に論争をやらぬとの事だがそれがあの研究所の研究所たる所以である硬化の第一原因なのだ。論争のない研究所全く聞いた事がない。馬鹿馬鹿しい」（第3信、1927年2月21日、『社会衛生学から革命へ』54-59頁）。

以後の国崎定洞の小宮義孝宛手紙は、ドイツや日本の政治情勢についての言及が多く、社会科学研究会への直接の言及は少なくなる。しかし蠟山批判は続く。今度は日労党系『社会思想』への蠟山の「在伯林」名での寄稿がベルリンに着いたらしい。蠟山はそこで資本主義の「相対的安定」のもとでのドイツ共産党の分裂に言及し、「モスコウ離れての共産党なるものは、今の処、世界の何処の国にも考えられない。恐らく、日本でも『共産主義派』なんて『レットル』をはられている諸団体も、現在の右翼との抗争より生れた日本性の相対的名称だろう」「『社会思想』の同人諸君の為すべきことは、[右派労働組合と左翼福本イズムとの] こんな自明な争ひの渦中に貴重な時を過すことであってはならない」とメッセージを送っていた（蠟山「独逸無産政党運動の現状と日本」『社会思想』1927年2月、31頁）。

もっとも、この頃日本にイギリスのゼネストなどヨーロッパの労働運動を紹介したのは、蠟山だけではなかった。読書会の創立メンバーである京大の谷口吉彦も、『改造』26年12月号に「英国の資本主義と労働運動」という論文を「在倫敦」として執筆している。つまり、この読書会は、当時の日本の論壇の一縮図という面をもっていた。これも、国崎の検討材料になる。国崎は、有沢だけを高く評価する。

「われわれの日曜会の事はもう知つてゐるだろう。小児病を急速に終つて今ブハリンをやつてゐる。こちらに来てかなり勉強もし、いろいろ本を読んでからこのブハリンにかかつて見るといままでの考をずっと深められる、それに日々の事実から証明を与えられて行くので。こちらに来ていい事はこの日々のプラクシスから教へられる機会の多い事だ。日本にいと日和見主

義もさかへる。こちらでは日和見主義は労働階級の敵たる事はわれわれにはかなりはつきり分る。……

連中の中では俺は経済の有沢を一番いいと考えてゐる。あいつは中々勉強もするし、くへないづーづーしさ（冷静と云ふてもいい）を持つてゐる。そして一番マルクスのだ。外の連中はまだまだだめだと思ふ。そう云ふ俺も勿論まだだめだが。ロー山氏についてはさきにも書いた。どうだ見よ。ゼネラルストライキで階級の裏切者に道徳的感激の涙を流した奴だ、今や公然と共産主義を迷妄といつてゐるぢゃないか。（社会思想を見よ）。

君は今日労に入つてゐるのか。民衆新聞編集部の連中は皆日労党に入つたと聞いたがどうか。社会思想は大体日労を支持してゐるのだろうがロー山が社会思想の同人だ。然し今まで連中之ほどはつきり物語つた奴はない。共産主義が迷妄だつて。然らば何が迷妄でない外の社会科学があるか、聞き度いものだ。彼の社会思想に出したドイツの労働運動と日本、話を聞いた時はドイツに来ていくらも立たぬあれ、よくかけたものと驚いたが、そして大凡の内容も想像していたが今度あれを読んで一方ならず驚かされた、予想以上のものだ。ゴミ箱をひつくりかえて更にかきまはした様なものだ。紛々たる似非学者の臭気と、それとあの雑然たるウイルワールを見よ。かくの如きを陣営内に許す社会思想の現実的表現でもあるのだ。……

この間吾々の仲間の経済（京都谷口吉彦）の谷口氏の英国の資本主義と労働運動の批判を俺がやった。この書簡箋に17枚位かいた。（一つの綱要だが）主として方法論的批判を行った。いま谷口氏が持つてゐつた。今度の日曜彼がその駁論をやるだろう」（第5信、1927年4月15日、『社会衛生学から革命へ』83-85頁）。

まだ高野岩三郎がベルリン滞在中の1927年6月頃、有澤廣巳と国崎定洞は、二人でロンドンに旅する（有澤廣巳の昭和史編纂委員会『歴史の中に生きる』非売品、1989年、296頁の「略年譜」には千田是也も同行とあるが、千田の入独時期・回想から二人だけと思われる）。そこで、イギリス在住の政治学者茂木惣兵衛に会った模様である。茂木は、ベルリンにおける岡上守道と似た、ロンドン在留日本人知識人コミュニティの中心である。国崎は、茂木惣兵衛の話のなかに、蠟山のゼネスト評価の原型を見いだした（茂木については『茂木惣兵衛遺文集』非売品、1935年、この編纂委員会代表が蠟山政道である）。

「英国に渡つてあつちのパンフレット類を集めて来た。中々読む暇がない。それから、面白かつた事は例の俗学蠟山氏の改造にかいた諸論文の源泉を見つけた事だ。あのゼネラルストライキから社会思想に出ていた通信なんか皆出てくるところはわかる。英国に例の茂木惣兵衛氏——生糸の茂木破産した茂木の主人公だ——がある。失敗以来ロンドンに来て政治学を勉強してゐるんだね。そして、彼はILP〔独立労働党〕のメンバーなんだ。ILPなんてものは大体ブチブルの政党で独立労働協会（もうあるまいがあれを政党にしたやうなもの）に似たりよつたりだ、茂木氏が蠟山氏の見解の出どころだらうと考える。ゼネラルストライキから今度の労働組合法なんかについて聞いて見ると、ロー山氏そつくりの事を云ふ。矢張り総評議会はゼネラルストライキを裏ぎる事によつて、英国労働運動を破滅から救つたと云ふんだ。そしてKPE〔イギリス共産党〕やNMW〔党全国少数派運動〕なんて問題にしないんだね。こふ云ふイデオロギーをもつてゐる党や組合主領をもつてゐる間は英国のブルジョアは太平だらう」（第7信、1927

年7月6日、『社会衛生学から革命へ』113頁）。

大原社研所長高野岩三郎は、27年7月1日にベルリンを離れ、モスクワに向かった。こうしたベルリン社会科学研究会の雰囲気は、11月帰国後の高野の旅行記（前掲「欧露をめぐる」）にどのように反映されたかは確言できないが、同年末の「日本労農党の党首または顧問就任を懇請されたが断る」（前掲「年譜」461頁）という選択の、一つの底流になったとはいえるかもしれない。

4 有澤廣巳はなぜベルリン滞在を延長したか

1927年夏に、東大新人会出身で4月に卒業したばかりの与謝野譲が、ベルリンにやってくる。与謝野寛（鉄幹）の弟修の結婚前の子で、一時は寛・晶子夫妻の子として入籍されていた。日労党系の彼の来独については、国崎定洞は警戒している。「与謝野氏この大切な時に何しにこちらにきたか、なぜ来たか？ 知らせてくれ」と小宮義孝に問い合わせた（第8信、1927年8月24日、『社会衛生学から革命へ』121頁）。小宮の返事は残されていないが、10月には次のように書いている。これは、日労党か労農党かという当時の日本左翼陣営の論争のなかで、国崎定洞が、明確に労農党の方を選択したことを意味する。

「与謝野に対する注意有り難う。明確な理論を以てゐると思へない。然し恐ろしく小才のきく男らしく見える。それだからどちらでも姿勢次第で運動する可能性をもつてゐるやうだ。然し確固性に於ては？ 今までのところまだよくわからない。勿論ここでは左翼的な事を云ふ。そして礦山の左翼化に努力することは云ふ。その限りに於て僕はだに彼を支持してゐる。そして一緒に仕事をしてゐる。然し彼がまた日本に帰つて菊川[忠雄]なんかに反抗してまでその主張を通し得るかは？ かもしれぬ どうも少しりこうすぎるやうだ。

こちらではわれわれの会も一段階進展した。と云つてまだまだ雑然たる会合のものだから——それはやむを得ないが——とにかく一つのルーズな組織として認められ、いろいろ仕事をし得るやうになつた。最近リガ（最近巴里で第二会大会をやる[国際反帝同盟]）の仕事をしてゐる。その関係で支那の国民党のゲノッセ[同志]を通じてドイツのゲノッセともある連絡が可能となりつつある。最近の会合ではヘルマンヅンカー（Hermann Duncker）が来てマルクシズムの特質をしやべつた。いいじいさんで、やはりなれてるだけに、極めてヨリヨリよくしやべつた。その他のゲノッセもいづれ来てくれるだらう。

最近浅野宛に小生労農党の党员（大学のプロ[フェッサー]はいかんさうだがそんな事はどうでもいい）になるやうに話した。こちらでは組織体の一員でないといろいろなものを見る事は困難だ。もつと深く見度いと思ふからモチロン、ブソイドニーム[偽名]で党员になれるやうにしてくれ。勿論労農党员としての面目を汚すやうな事はしないから安心していいだらう。最近ヨサノは支那の国民党の革命記念日に演説した。そして小生がプロテストブリーフを送つてやつた。勿論僕は決して演説なんかせんから、これも安心してくれ。公会の席上に出すのは、ヨサノと労農党员役者千田是也を出してゐる。インターナショナルの連絡をつける事はいづれにしても必要と思ふ。近くこちらの学生コムニストの会合に出るつもりだ。われわれの会も質的には向上を示してゐると思ふ。……

日本と各国との連絡が不足だ。片山潜氏のところあたりにも日本から何らの報道も行かないらしい、新聞雑誌も来ないらしいと云ふ事だ。こちらから送つてゐる、千田の手を経て、それも極めて不足、出来たら（また金を送るから）運動の雑誌新聞僕宛に2部づつ送らせてくれ。片山氏勿論老人であり、役に立つまいがとにかく日本の代表者として認められてゐる。かれの醜体（もしあるとすれば）は日本の恥だ。少くとも左翼運動の全報導⁷⁷だけは彼のところにやり度いと思ふ。こちらから送ると安全。Rote Hilfe [赤色救援会]の手を経て、郵便ではなくやるから心配はない。よろしく連中に話してくれ、それからインプレコール [コミンテルン機関紙] あたりにもつと日本の状況報告出る事が望ましい」（第9信、1927年10月14日、『社会衛生学から革命へ』125 - 130頁）。

ここで国崎定洞が述べているように、日本人社会科学研究会は、1927年の秋頃から、ドイツ共産党の理論家で党学校で教えていたヘルマン・ドンカーを講師に招く。有澤廣巳の回想には、次のように出てくる。

「この読書会を通じて、ぼくはちょっと珍しい二つの経験をすることができたのです。一つは、ヘルマン・ドンカーと会う機会をもったことです。ドンカーといっても現在ではその名を知っている人はあまりないでしょうが、この人はたしかベルリン最大の書店プラーガーの古書部の顧問みたいな仕事をしていた文献通で、1920年代にはマルクスやエンゲルスの著作を編集し自分の解説を付して、小冊子として刊行していた。そしてそういう人としてその名が知られていた。そのドンカーの本に、本文にも解説にも誤謬があるのを読書会のメンバーのひとりが発見した。その点を問い合わせる手紙をドンカーに出したところ、大変感謝されたうえ、ぼくたちの研究会に一度出てみたいという返事であった。それで彼は2、3回読書会に出てきて、ドイツの社会運動の話をしてくれたのです。それも文献と関係させて話してくれるので、ぼくにはたいへん有益でした。

たしかドンカーの紹介ではなかったかと思いますが、その当時、ベルリン大学の学生団体（Studentenschaft）のリーダーだと称するライスマン（Reissmann）に会ったことがある。しかもライスマンにつれられて学生たちの会合に一度出たことがある。あるビヤホールの奥まった室に2、30人の学生が集まっていて、ライスマンとぼくとがはいってゆくと、拍手で迎えてくれた。ぼくは別に用意はなかったが、学生たちの求めに応じて、しばらく日本のことについて断片的な話をした。そのときはそれだけのことですが、日本に帰ってのち、“Die Internationale” [ドイツ共産党理論機関誌] 誌上にときどきライスマンの論文を見るようになって、はじめて彼が左翼の理論家としての若い経済学者であることを知ったのです」（『学問と思想と人間と』119-120頁）。

もともと蠟山政道の提唱から始まったベルリン社会科学研究会は、全体として国崎定洞や堀江邑一に牽引され、ドイツ及び日本の共産党系に近づいていった。とりあげる文献も、マルクス主義のなかでも経済学の現状分析やソ連の政治指導者の文献に傾いていった。こうした方向は、特に菊池・舟橋ら蠟山の系列で加わった法学者たちには、抵抗のあることだったろう。

脇村義太郎は、ベルリン留学時代の有澤廣巳についての舟橋諄一・横田喜三郎からの聞き取りにもとづいて、読書会の「法律学者の人びとの中では、ケルゼンの研究をやる人とマルクス主義の研

究をやろうという人と二つのグループがあって、結局、二つのグループのあいだの調整がうまくいかないで、研究会としてはあまり効果を挙げなかったという印象を、私は舟橋君や横田さんの言葉のはしばしから受けました」と書いている（協村「ワイマール共和国ベルリン時代の有澤先生」有澤広巳の昭和史編纂委員会『回想』非売品、1989年、21頁）。

実は、戦後の最高裁判所長官横田喜三郎も、1927年7月初めから28年1月のベルリン滞在中、社会科学研究会に加わっていた。横田は自伝『私の一生』（東京新聞出版局、1976年）に、26年1月から28年10月帰国までのフランス、ドイツ、アメリカ留学の模様を、日記にもとづいてかなり詳しく記している。フランスへの出発時は、一緒に東大法学部を卒業し九州大学への就職が決まっていた菊池勇夫と同じ船での渡航であった。パリでは菊池の旧制一高弁論部以来の親友で私費留学中の農商務省官吏芹沢光治良が二人を出迎え、菊池と同じ下宿に入った。翌27年7月ベルリンに移ったさいに出迎えたのは、横田・菊池の後輩で菊池と同じ九州大学赴任が決まっていた舟橋諄一であった。ドイツでは国際法とケルゼンの純粋法学を研究し、28年1月アメリカに渡ってハーバード・ロースクールに学んだ（同書、88-93頁）。横田のこの記録と、芹沢の菊池追悼文から、九大の菊池勇夫夫妻は、横田夫妻がベルリンに滞在する27年後半の時期にはイギリスに渡ったことがわかる（芹沢光治良『こころの広場』新潮社、1977年、78頁）。

ところが横田喜三郎のベルリン時代の詳しい回想には、有澤広巳も国崎定洞も、社会科学研究会のこともでてこない。わずかに有澤広巳没後の追悼文に「1927年の秋にベルリンに移った。有澤君は、はじめからベルリンに留学していた。わたくしがベルリンに移ってから、かれと会い、話しあうようになった。もっとも、それはときどきのことであり、あまりしばしばではなく、とくに親しくなるというほどではなかった」と、微妙ないいまわしの、距離をおいた書き方をしている（横田「90年苦楽の道」『学士会会報』第780号初出、有澤広巳の昭和史編纂委員会『回想』6-7頁）。協村義太郎に社会科学研究会への出席の有無を問われ、ようやく事実を認めたのが、上述の「あまり効果を挙げなかった」という評価である。蠟山政道と同じく、蠟山がいなくなってからベルリン入りした東大法学部の横田喜三郎も、医学部の国崎定洞というより、経済学部の有澤広巳のベルリンでのマルクス主義への傾倒を、苦々しく思っていたのであろう。

社会科学研究会の変化は、モスクワ在住の日本労働運動の父、コミンテルン幹部会員片山潜との関係からもわかる。高野岩三郎の7月モスクワ訪問が橋渡しになったか否かは確言できないが、5月に到着した千田是也の父伊藤為吉が片山の旧友で千田が片山と会ってきた関係もあり、27年秋には、このグループとコミンテルン幹部会員片山潜の連絡ルートができていた。27年12月初め、ブリュッセルで国際反帝同盟総評議会が開かれ、日本代表として片山潜のほか、ベルリン在住の千田是也が労農党代表として、与謝野譲が日労党代表として出席する。反帝集会の模様は千田・与謝野がそれぞれに書き残しているが、「ブリュッセルの帰りに片山さんが2、3日ベルリンに滞在されたので、日本人社会科学研究会の連中で、ニュルンベルグ広場のそばの東洋軒にお招きして、その奥まった部屋でスキ焼きをつつきながら、色々お話をうかがった」（千田『もうひとつの新劇史』173頁、与謝野「最近欧羅巴に於ける反帝国主義運動の進展」『改造』1928年3月号、『人間 国崎定洞』189頁の堀江一証言も参照、堀江は別の回想で「東洋軒」ではなく「ときわ屋」だったとする、前掲堀江「国崎定洞の憶い出」106頁）。ただし、横田喜三郎が片山潜と会ったか否かは不詳で

ある。

この頃には、国崎定洞の小宮義孝宛手紙にあるように、当時の片山潜の主たる活動領域である国際反帝同盟やモップルに国崎・千田らが加わり、「労農黨員役者」千田是也を窓口に、モスクワに手紙や書物を送ったり、千田がKPD系集会で挨拶するようになっていた。もともと読書会だった社会科学研究会のなかに、積極的に実践活動に加わるメンバーが現れ、マルクス主義文献の読書会が実践の性格を帯びてきた。国崎定洞、堀江呂一、千田是也らは、急速にドイツ共産党に接近する。

堀江呂一は、この27年冬頃、ドイツ共産党に入党を勧誘され、国崎定洞と一緒に入党したと述べている（『人間 国崎定洞』138頁の川上武への証言、前掲「国崎定洞の憶い出」106頁）。しかし国崎定洞は、ソ連崩壊後の1992年に発掘された旧ソ連共産党文書館秘密文書「国崎定洞ファイル」に入っていた自筆履歴書（1932年執筆）中で、「1928年初め、赤色救援会ドイツ支部に入会、次いで1928年7月、ドイツ共産党に入党す」と明言している（『人間 国崎定洞』232頁）。千田は、自分のドイツ共産党入党を29年夏としている（『もうひとつの新劇史』193頁）。堀江のKPD入党も、28年に入ってからであつたろう。

千田是也は、ブリュッセル国際反帝集会で日本の労働農民党代表として挨拶するにあたって、最も信頼できる友人として国崎定洞、有澤廣巳と相談している（『もうひとつの新劇史』173頁）。有澤廣巳は26年3月に日本を出発したから、28年3月が文部省在外研究員としての帰国時期にあたっていた。しかし、有澤は私費で延長して5月までベルリンにとどまり、パリ・アメリカ経由で28年7月に帰国した。この有澤の留学期間延長は、有澤廣巳に近い人々には謎とされてきた。最も親しい友人の一人であった脇村義太郎はいう。「先生が留学を私費で6ヵ月延長してまでベルリンにとどまれたのは、当時、私と大森義太郎君にとっては謎でした」（前掲「ワイマール共和国ベルリン時代の有澤先生」『回想』26頁）。

脇村は、「[有澤先生は] ドイツではむしろ共産党の人たちと接触していた。平野義太郎君とか、モスクワに行った国崎定洞とか」と示唆するのみで明言していないが（脇村『回想 90年』岩波書店、1991年、143頁）、同じく有澤直系の高橋正雄は、この「謎」解きに挑戦している。

「私なりにこの『謎』を解いてみよう。さきに『労農派』について一言したが、そのころ進歩的学者のうばい合いが、共産党と労農派の間にあった。その国際版が、ドイツを舞台にして有澤さんを目標として行われた。そのころ東大医学部から留学していた国崎定洞助教授はドイツ共産党に入党（後にソヴェトに奔り、スターリンの弾圧下で死亡）している。その国崎さんと有澤さんは親密な交友関係にあった。ここに謎解きのカギがあるように私には思われる」（高橋「大学の『うち』と『そと』」『回想』42頁）。

たしかに有澤廣巳は、国崎定洞や舟橋諄一、堀江呂一、平野義太郎らと同様に、ベルリンでロシア語の勉強を始めている（『学問と思想と人間と』127頁）。高野岩三郎と同様に『資本論』を3巻まで読破し、舟橋諄一にF. メーリング『カール・マルクス』を勧めたりしている。

だがむしろ、脇村義太郎が「有澤先生のドイツでのご勉強の中心は、マルクス主義の研究を深められるということでしたが、レーデラー教授がハイデルベルグへくるようにといて、せっかく下宿まで用意して待っているという伝言があったようですが、有澤先生はついに行くことをなさらなかったようです」という問題に関わって（『回想』25頁）、有澤の留学の目標設定が重要であったよ

うに思われる。

エミール・レーデラーは、マルクスとウィーン学派に詳しいSPD系の経済学者で、有澤の助手時代に東大経済学部で教鞭をとった。有澤廣巳と大森義太郎を最も有能な日本人の教え子として期待し、25年にドイツに帰国してハイデルベルグ大学教授に戻っていた。有澤のドイツ留学は、当然自分のいるハイデルベルグであると思っていた。ハイデルベルグ大学は、有澤の学部時代のゼミナールの恩師であり高野岩三郎の統計学講座を継いだ糸井靖之が、大内兵衛と共に留学して24年末に結核で若くして客死した地でもあった。レーデラーは、27年4月ニュルンベルグのSPDアカデミカー大会に有澤を誘い、有澤にヒルファーディングを紹介し、ベルリンからハイデルベルグに移るよう誘った。有澤は、その場では「ぼくは大学での研究よりも、ドイツの政治経済の過程の分析を留学中にやりとげておきたい、それにはベルリンにいないと考えると考えていたものですから、その旨を申し述べた」（『学問と思想と人間と』102頁）。さらに数カ月後、「ぼくも秋からハイデルに行こうと思ったのですが、その秋、高野先生のすすめで、ワグマンの〔景気〕研究所にはいることになったので、とうとうふたたびハイデルを訪れることはできませんでした」（同書103-104頁）。どうやら高野も、有澤の左翼化に一役買った、というよりも、カモフラージュに使われたようである。

有澤廣巳は、ビールもほとんど飲めないのに、千田是也の回想する在ベルリン日本人の夜の宴には加わらなかった。国崎定洞のドイツ共産党入党には女性党員活動家フリーダとの出会いがあり、千田是也や鈴木東民らはドイツ人女性と結婚して帰国したが、有澤のベルリンでの青春は、より学究的であり、理論的であった。

同時に、有澤回想にドイツ共産党イデオログのドンカーやライスマンが出てくるように、この時期有澤廣巳は、彼の長い生涯のなかで、おそらく最もマルクス主義及び共産党に接近していた。日本の労農党、ドイツ共産党に急速に近づいた国崎定洞をして「一番マルクスのだ」といわしめるほどの、勉強ぶりであった。そして、「1928年5月20日のドイツの総選挙を見て、まもなくパリにゆき、そこで谷口（吉彦）君と連れ立って、シエルプールからアメリカに渡り、アメリカで40日ぐらいあちこちを見物して7月半ばに帰国したのでした」（『学問と思想と人間と』125頁）。帰国にあたって最後に別れを告げたのは、ハイデルベルグのレーデラー教授ではなかった。フリーダ夫人と結婚し、約束された東大社会衛生学講座初代教授のポストを捨てて異国での職業革命家への道を歩み始めた国崎定洞だった。

有澤廣巳の帰国直後の印象記は、SPD・KPD 前進の総選挙結果をふまえて、「左翼優勢の独逸」と題されていた（『帝国大学新聞』1928年8月6日）。だから、高橋正雄の別の回想によると、「有沢さんが、ドイツ留学から帰ってきたのですが、当時は、日本の若い学者や東大が主である新人会のメンバーが、押すな押すなの状態で有沢さんのところに押しかけて共産党に入党するよう働きかけをしていました」（高橋正雄『二十世紀の群像』第一書林、1989年、37頁）。

しかし、有澤廣巳は、コミンテルン傘下の共産党活動には加わらなかった。3・15共産党検挙で厳しくなった状況を大森義太郎・大内兵衛・矢内原忠雄らから聞き相談したうえで、「自分は学究として今後大学に留まっていこう」決意を固めた（脇村前掲論文、『回想』28頁）。ナチスの台頭とワイマール民主主義の崩壊をペンで批判し追いかけてながらも、いわゆる労農派に近い存在として理論活

動を続け、1938年には教授グループ事件で検挙され、入獄する。そして戦後東大に戻り、日本の再建期にはなばなく活躍したのち、晩年には再びワイマール共和国はなぜ崩壊したかの研究に専念した。有澤は、有澤なりに、ワイマール期ベルリンの青春を謳歌し、晩年までその意味を追求し続けたのである（有澤廣巳『ワイマール共和国物語』上下、東京大学出版会、1994年、参照）。

5 おわりに——読書会からベルリン反帝グループへ

1928年に入って、社会科学研究会は転機を迎える。一つは有澤廣巳・国崎定洞・堀江邑一ら創立に加わった文部省派遣在外研究員たちが2年の国費留学期間の満期を迎えたことであり、いま一つは、日本における共産主義運動への弾圧、3・15事件である。3・15事件では、国崎定洞の親友浅野晃らが治安維持法違反で捕まり、有澤廣巳の親友大森義太郎・向坂逸郎らは大学を追われた。

この頃までにベルリン社会科学研究会に顔を出したメンバーについては、これまで言及してきた蠟山・有澤・谷口・堀江・国崎・鈴木・菊池・舟橋・松山・山本・山田・岡上・土屋・与謝野・横田のほか、先の有澤・堀江・千田らの回想から、フランクフルトに留学した東大民法助教授平野義太郎や、東大の統計学助教授有澤の帰国直前にベルリンに到着する京大統計学助教授蜷川虎三が確認できる。

平野義太郎の留学は文部省の妨害で遅れていたが、ようやく1927年3月フランスへと出発、12月にフランクフルト大学社会科学研究所に到着し、29年11月の帰国まで、ここを拠点にヨーロッパに滞在する。回想ではベルリンの有澤廣巳・土屋喬雄・国崎定洞・蜷川虎三との交友しか挙げていないが（広田重道編著『平野義太郎評伝・上』非売品、1974年、64頁以下）、ベルリンの社会科学研究会へのたびたびの出席は、堀江邑一が記録している（堀江「畏友・平野義太郎氏の思い出」『平野義太郎・人と学問』大月書店、1981年、42頁以下）。私も晩年の平野から、しばしば聞かされた。

有澤廣巳は、帰国準備期に3・15事件を知ったのは、パリにいたと思っていた旧知の平野が突然ベルリンに現れた時だったと回想している。有澤が「平野君の紹介状を持ってひとりの若い日本人がぼくをたずねてきたことがあった。その日本人は、パリから立ち退きを命じられたので、ともかくもベルリンにのがれてきた、これからソ連に行くつもりだが旅費がないとの話だった。それでなにがしかの旅費をあつめて餞別に送ったことがあった」と記しているのは（『学問と思想と人間と』126頁）、もともと蠟山政道が平野に紹介したパリ大学留学生で、フランス共産党員として国外追放になった文学青年勝野金政のことである。

勝野金政は、28年3月、ベルリンで国崎定洞宅に滞在し片山潜宛の紹介状をもらってモスクワに入り、片山の秘書となる。30年秋に突然ソ連秘密警察に逮捕されラーゲリ生活を送ったことが、32年にベルリンからモスクワに亡命した国崎定洞のスターリン粛清の悲劇の発端となる（勝野『凍土地帯』、加藤『モスクワで粛清された日本人』参照）。なお、勝野はパリ大学で芹沢光治良と一緒にであったが（『凍土地帯』14頁以下）、前述したように後の大作家芹沢は九大の菊池勇夫と一高弁論部以来の親友で、ヨーロッパ滞在中もたびたび会っていた（芹沢「長い旅路の伴侶」『こころの広場』75頁以下、131頁以下のパリ大学の「小柄な哲学生」が勝野）。この頃の在欧日本人は、ベルリン、パリ、ロンドンを中心に、血縁・地縁、出身高校・大学を基礎にした、緊密なネットワークを

持っていた。

戦後の革新京都府知事蛭川虎三が、ベルリンから律子夫人に送った絵葉書が残されている。28年5月末のもので「近日、東大の有沢君が日本へ帰るので、送別の意味で雨の中をポツダムのサンスウシイの宮殿のある処に出かけました。京都の連中は谷口、八木[芳之助]、堀江君、高松の某君など、東大の平野、有沢、土屋君など、その他合わせて13人、なかには築地小劇場の若い俳優の人[千田是也]もあり、この写真の階段を登りつめたところでフルードリッヒ大王のマネをしりました」とある（細野武男・吉村康『蛭川虎三の生涯』三省堂、1982年、46-47頁）。ただし蛭川の回想録『洛陽に吼ゆ』（朝日新聞社、1979年）には社会科学研究会への言及はなく、評伝の著者たちは「蛭川は、谷口に誘われて有沢の送別会に顔を出しただけで、読書会には顔を出さなかったようである」としている（『蛭川虎三の生涯』47頁）。しかし堀江邑一や平野義太郎の回想にも、後述岡内順三の警察供述にも、蛭川の名は登場しており、熱心ではなくても顔をだしていたのだろう。京大農業経済学の八木芳之助も、読書会メンバーだったと考えられる。有澤廣巳の没後に発表された脇村義太郎の聞き取り調査では、さらに京大法学部政治学・行政学担当のケルゼン学者黒田覚も、ベルリン滞在中は研究会メンバーであった（脇村「ワイマール共和国ベルリン時代の有澤先生」前掲『回想』21頁）。堀江の回想には「本島君」という名前も出てくるが、私の調査では現在のところ不明である（『人間 国崎定洞』154頁）。

堀江邑一は、「この研究会の幹事役は最初有沢があたり、つぎに国崎、さらに私へとバトンタッチされたが、私にとっては2年余りの間にマルクス・レーニン主義の重要文献に通ずることができ、大変勉強になり、有益であった」「私たちが帰ったあとは、国崎が中心になって世話する会合になった」と回想したが（前掲『国崎定洞の憶い出』105頁、『人間 国崎定洞』154頁）、幹事については必ずしも特定できない。読書会として読んだ文献は、これまで挙げた各種回想・資料から、マルクス『ブリュメール18日』『フランスにおける内乱』、エンゲルス『住宅問題』、レーニン『国家と革命』『帝国主義論』『共産主義内の左翼小児病』、スターリン『レーニン主義の諸問題』、ブハーリン『過渡期経済論』『史的唯物論』、ヴァルガ『世界経済の没落』などが確認できる。そのほかに、それぞれの専門分野での報告が行われ、学際的に討論された。ドゥンカーらドイツ人ゲストが加わることもあり、片山潜を招いての会合もあった。野球をしたり、ハイキングに行ったり、親しいメンバーで旅に出ることもあった。多くのメンバーが若かった。ワイマールドイツは、当時の世界で最も民主的な憲法を持つ国であり、その首都ベルリンは、世界の学術・文化・芸術の中心であった。

これら学者たちのほかに、千田是也の周辺の文化・芸術関係者たちも、時に顔を出していた。多くの創立期読書会メンバーが帰国した後もドイツに残る国崎定洞・鈴木東民・平野義太郎らと、千田ら芸術青年グループが、29-33年に実践活動に入るベルリン反帝グループの中核になる。千田のもとにやってきた映画監督の衣笠貞之助やプロキノの岡田桑三は、この端境期の会合に顔を出したと思われる。

千田是也と同じ頃に、音楽研究のためにベルリンに入った岡内順三（作家村山知義の義弟）は、姉簀子の夫村山が獄中にいた1932年春の帰国にあたって、日本で外事警察の取り調べを受け、ベルリン反帝グループについて詳しく供述している。最近復刻されたその警察記録には「在伯林日本人マルクス主義読者会（自1926至1929）」という名で、これまで詳述した社会科学研究会のことが記

されている（内務省警保局「昭和8年中に於ける外事警察概要・欧米関係」『特高警察関係資料集成』第17巻，不二出版，1992年，363頁）。そこに岡内は，28年千田の紹介で加わり，毎週土曜日午後2－6時ビアホールに集まり，エンゲルス『住宅問題』，レーニン『国家と革命』，ブハーリン『史的唯物論』などを読んだという。岡内のあげる28－29年期の読書会メンバーは，与謝野諒・千田是也・有澤廣巳・舟橋諄一・土屋喬雄・国崎定洞・岡上守道・山田勝次郎・鈴木東民・堀江邑一・蜷川虎三（国際法学者蜷川新の名になっているが「京大助教授」で年齢・留学時期からも虎三と推定できる）のほか，「浦和高校体操教師」とある工藤一三（柔道家），今日まで私の調査でも手がかりのない「山田一（帰国後神戸税関勤務）」「山形太助（横浜出身の画家）」がいる。岡内供述には，「主催は国崎なるも表面に立たず，当時東大助教授のため」と注記されている（加藤『国民国家のエルゴロジー』73頁以下，参照）。岡内供述によると，この「在伯林日本人マルクス主義読者会」が，1929年末から「日本人革命的左翼主義者団」の指導する政治的組織になるという。実践的組織となったベルリン反帝グループのことである。

しかし，ベルリン社会科学研究会が，いつから「在独日本人左翼グループ」「在独日本人革命家グループ」などともよばれた日本人反帝グループに発展的に解消するかは，厳密には特定できない。28年夏の国崎定洞，続く千田是也のドイツ共産党入党によるKPD日本語部結成がその出発点であり，29年以後の勝本清一郎・島崎薊助・藤森成吉らプロレタリア文化運動関係者の来独，小林陽之助・根本辰ら日本で学生運動を経験した若い留学生たちの加入が，飛躍点になったのであろう。

後に三宅鹿之助・服部英太郎・川村金一郎・山口文象・和井田一雄・喜多村浩・安達鶴太郎・嬉野満洲雄・八木誠三・小栗喬太郎・岡部福造・井上角太郎・小林義雄・佐野碩・三枝博音・野村平爾・大野俊一・大岩誠・千足高保・山西英一・鳥居敏文・竹谷富士雄・土方与志らが関わるベルリン反帝グループ，及び，このグループと大岩・嬉野・野村・和井田・佐野・大野らがメンバーとして重なり，画家の内田巖・田中忠雄・佐藤敬・吉井淳二，美術評論の富永惣吉，建築家坂倉準三，化学者平田文雄らが加わっていたパリの姉妹組織ガスパ（在巴里芸術科学友の会）については，別稿で改めて検討することにする。さしあたり，加藤哲郎『国民国家のエルゴロジー』，加藤・川上『人間 国崎定洞』の参照を望む。

また，国崎指導下の反帝グループの活動と同時期に，東大新人会での蠟山政道の後輩で同じ『社会思想』同人である東北大学教授新明正道らが，別の留学生研究会を組織していた。新明は，国崎グループからは意識的に距離をおいて，東京商大出身の杉本栄一・小畑茂夫・大熊信行・井上鎧三，それに同僚服部英太郎を誘って，30年夏－秋に，KPDから追放されたカール・コルシュ及びアウグスト・タールハイマーを囲む研究会を開いていた（加藤哲郎「ベルリン反帝グループと新明正道日記」『新明社会学研究』第5号，1995年，参照）。帰国した堀江邑一は，師の河上肇にベルリンの国崎定洞を紹介し，それが河上の教え子岩田義道にまでつながって，後のコミンテルン「32年テーゼ」の伝達ルートとなる（加藤哲郎「政治と情報——旧ソ連秘密文書の場合」『情報と社会』創刊号，1996年，参照）。

これらをもとに，1926－28年期のベルリン社会科学研究会のメンバーを，その後の経歴を含めて整理すると，おおむね別表のようになる。

それは，東大森戸事件・吉野作造・新人会の流れを汲む若手研究者たちと，京大河上肇の教えを

〈ベルリン社会科学研究会参加者・関係者一覧〉

氏 名	生没年	渡 航 前	滞独期間	当 時	渡航後・戦後
蠟山 政道 有澤 廣巳 国崎 定洞 堀江 邑一 谷口 吉彦 山本 勝市	1895-1980 1896-1988 1894-1937 1896-1991 1891-1956 1896-1986	一高、東大法20卒・新人会、22助教授 二高、東大経22卒・24助教授 一高、東大医19卒・24助教授 京大経22卒・24高松高商 京大経22卒・25助教授 京大経23卒・23和歌山高商	26・10-27春 26・4-28・5 26・10-32・9 26・9-28・9 26・10-28・5 25・3-27・9	東大法助教授 東大経助教授 東大医助教授 高松高商教授 京大経助教授 和歌山高商教授	28行政学教授、39平賀庸学辞任、54御茶の水女子大学長、68都教育委員長 38・2検挙、45-56東大教授、59-62法大総長、80-86学士院長 32・9モスクワ亡命、33クトベ、37・8・4逮捕・12・10銃殺 34検挙、40満鉄調査部・検挙、45日本共産党入党、57日ソ協会 33国際経済教授・40学部長、46追放・貿易商、53大阪市大教授、55香川大学長 31-32再渡独、32国民精神文化研究所、46自民党代議士当選5回
舟橋 諄一 菊池 勇夫 松山 貞夫 鈴木 東民 山田勝次郎 土屋 喬雄 岡上 守道 千田 是也 与謝野 譲 横田喜三郎 黒田 寛	1900-存命 1898-1975 1895?-1968 1895-1979 1897-1982 1896-1988 1890-1943 1904-94 1903-34? 1896-1993 1900-90	東大法24卒、副手 一高、東大法22卒、副手 東大法20卒・23福島高商 二高、東大経23卒・朝日 東大農22卒、25京大助教授 二高、東大経21卒、24助教授 一高、東大法16卒・新人会 早大中退、築地小劇場 一高、東大経27卒・新人会 八高、東大法22卒・24助教授 京大法23卒、25助教授	26-28 26-28 26-28? 26・8-34・3 27-28 27・4-29・7 20・6-32・8 27・5-31・11 27・8-34? 27・7-28・1 26・4-30・4	九大助教授内定 九大助教授内定 福島高商教授 電通特派員 京大農助教授 東大経助教授 朝日特派員 俳優・演出家 ベルリン週報 東大法助教授 京大法助教授	30九大法教授・64名誉教授、法政大学教授、民法 29九大法教授・49-53九大学長、労働法/ILO、芹沢光治良親友 33全協事件検挙免職、岩波辞典部、38満鉄調査部、48法務省法務図書館長 ベルリン週報、35読売新聞、44検挙、45読売争議、55-67釜石市長 30シンパ事件辞職、31プロ科、講座派、戦後共産党入党・64除名、高崎で実業家 39-57経済史教授、労働派、65朝日文化賞、明大・駒大教授 別名黒田礼二、大阪朝日露独特派員、34-36再訪後『日独旬刊』 33-35獄中、36新築地、54俳優座代表、新劇団協議会代表 寛の弟修の子、日労党系、一高で石田英一郎同級、秀は従兄、ドイツで客死? 30-57国際法教授・48法学部長、60-66最高裁判所長官、81文化勲章 33滝川事件で立命、35京大憲法教授、46追放、53都立・専修・神奈川大教授
八木芳之助	1895-1944	京大経21卒、26助教授	27・2-29・7 独英仏 独仏米	京大経助教授	34農業経済学教授・41-43経済学部長、在職中没
平野義太郎	1897-1980	一高、東大法21卒、23助教授	27・12-29・11 フランクフルト	東大法助教授	30シンパ事件罷免、講座派、36逮捕、戦時中民族理論、50日本平和委員会会長
蛭川 虎三 岡内 順三 工藤 一三	1897-1981 1907-53 1898-1970	京大経23卒、27助教授 高松中卒 東京高師22卒、佐賀高	28・4-30・3 27・3-33・2 26-29ベルリン 体育大	京大助教授 音楽研究 浦和高助教授	39統計学教授・45経済学部長、48中小企業庁長官、50-78京都府知事 村山知義義弟、高松出身、別名白髭渡、佐野碩とも関係、帰国後警察供述 土屋と帰朝、柔道家、国士館教授、41厚生省体育官、警察大教授・警視庁指南
山形 太助? (岡内調査) 山田 一? (岡内調査) 本島 某? (堀江回想) 高野岩三郎	1871-1949	東大1895卒、1903-19教授	27・5-6ベルリン 訪問	大原社研所長	マルエン全集翻訳計画、46日本社会党創立顧問、46NHK会長
片山 潜	1859-1933	日本労働運動・米共産党創立	27・12、29・7 ベルリン訪問	22-33コミンテル ン幹部会員	国際反帝同盟、国崎定洞をモスクワに招く
勝野 金政	1901-84	早大、24-28パリ大、別名林	28・3ベルリン経 由モスクワへ	28-30片山潜秘書	30根本事件でラーゲリ、34脱出帰国、陸軍・東方社、南木曾で実業家
衣笠貞之助	1896-1982	俳優・衣笠映画	28・8-30・5 千田と一緒	映画監督	俳優藤沢守、28「十字路」、32忠臣蔵、53地獄門でカンヌ映画祭グランプリ
岡田 桑三	1903-83	21-24独留学	29・9-12 ベルリン訪問	プロキノ映画	俳優山内光、エイゼンシュタイン、41東方社理事長、満映、科学映画製作、 61菊池寛賞

受けた人々が、ドイツという異国で合体したマルクス主義文献読書会だった。そこには日本の社会運動・政治思想のさまざまな流れが凝縮されており、次第に国崎定洞・堀江邑一ら左翼のメンバーの影響力が強まった。そこに、千田是也ら文学・芸術青年たちが加わることによって、実践への関わりが加速された。それは、当時の日本に比すればはるかに自由で民主主義的な異国の地における知的・人間的共同体であり、年齢も比較的若い人々に構成された、濃密なサークル的コミュニティであった。

同時にそれは、いつかは日本に帰国することが定められた人々の絆という、期限付きの青春であり、危うさ、もろさをはらんでいた。東大教授のポストを拒否してナチスの台頭するドイツで職業革命家の道を選び、モスクワに亡命してスターリンに粛清された国崎定洞を除けば、ワイマール共和国の自由と民主主義にコミットすればするほど、日本での天皇制国家に不自由に拘束されるという矛盾をはらんでいた。それが、それぞれのメンバーの、帰国後の軌跡の分岐をも生み出す。

にもかかわらず、強いてそこに何らかの共通点を見いだすとすれば、それは、ドイツのワイマール民主主義と戦後日本の民主主義を、それぞれの意味において架橋していることであろう。彼らの体験した異国での青春は、彼らの回想の多くにあるように、解放感にあふれ自由なものであった。政治的選択はさまざまに分かれたが、彼らが日本で体験した大正デモクラシーの雰囲気とは、比べようのないものだった。そのワイマール体制は、彼らの帰国後数年で瓦解する。しかもそこに生まれたのは、日本の天皇制よりも徹底したナチスの国家・社会統制であった。メンバーたちの戦時中の態度が興味深い、ここでは割愛する。敗戦・占領改革の時期に、メンバーたちは社会の中堅になっていた。そこで彼らの多くは、あのベルリンの青春を想い出す。それぞれの想いを込めて新生日本のあり方を設計し、それぞれに引き出したワイマールの教訓を、日本の民主主義に生かそうとする。それは、時には学問研究の範囲をこえて、今日までつながる政治・経済・文化のシステムの一部にもなる。高野岩三郎にとってのワイマール・ベルリンはほんの一瞬であったが、有澤廣巳や千田是也の戦後にとっては、決定的であった。たとえ今日から見れば、そこに大きな限界がはらまれていたにしても。しかしワイマール民主主義から戦後民主主義への長く波乱に満ちた物語は、すでに大幅に指定枚数をこえた小論では示唆するだけに留め、本格的展開は他日を期したい。

(かとう・てつろう 一橋大学社会学部教授)